

現代オペラ演出、あるいはニュー・ミュージコロジーの劇場

——ローレンス・クレイマーの音楽解釈学再考——

新田孝行

現代オペラ演出は音楽学の新しい課題である。ドイツ語圏ではレジエーター（演出演劇）がオペラ愛好家や理論家の間で議論を呼んできた。台本上の地理的・時代的設定や登場人物の役柄、プロットを変更する権限を演出家に認めるレジエーターは、「作品への忠実さ」を尊重せず、こじつけ的解釈を好む演出家の横暴と批判されることも多い。しかし、これを擁護する側は、台本やスコアだけでなく上演もオペラに含まれるとする記号論的観点から、忠実さの要求が的外れにすぎないと主張する。

現代オペラ演出は、1990年代のアメリカで発展したニュー・ミュージコロジーと比較することができる。いずれも学問的・芸術的実践に属する。前者が音楽学的に再検討されたオペラ上演ならば、後者は研究者による主観的・修辭的音楽言説である。両者はまた音楽作品の意味を動かそうとする。演出家は音楽家ではないが、演出によってオペラのイメージをつくりかえることができる。同じ目的のためニュー・ミュージコロジストは、ある楽曲をそれに新たなものを付け加えるような言語によって解釈する。

言い換えれば、現代オペラ演出とニュー・ミュージコロジーはともに解釈学的性格を有する。ドイツ文学者ゲアハルト・ノイマンは、それを通してオペラに秘められた矛盾した意味が明らかになる窓としてレジエーターを定義した。似たような考えに基づいて、ニュー・ミュージコロジーを代表する一人のローレンス・クレイマーは、自らの音楽解釈学を「解釈学的窓」という観点から定義している（『文化的実践としての音楽』、1990年）。最終的に、現代オペラ演出はニュー・ミュージコロジーの演劇的で、より説得的なヴァージョンと言える。なぜなら、劇場では作品とその解釈を区別することができないからである。